青陵

第169号

二〇二三年五月一九日発行
発行者　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者　木村理恵

「アジアをつなぐ美と精神」展の顛末（中）

坂靖

四．日中国交正常化五〇周年事業

開幕式には、荒井知事と青柳所長がVTRメッセージを寄せ、海野氏が奈良県側の唯一の出席者として挨拶した。また、外務省の日中国交正常化五〇周年記念事業ということで、日本大使館から貴島善子公使（広報文化部長）も参席し、挨拶をされた。

ところで、この日中国交正常化五〇周年記念事業をめぐっては一悶着があったらしい。あくまで伝聞だが、「日中国交正常化五〇周年記念」と冠をつけて展覧会を開催することについては、中国側が八月末まで難色を示していたという。そして、関係者の粘り強い交渉によって突如中国政府がその方針を変え、ようやくそれが実現したということのようだ。コロナ禍のなかで、それをおしてまで開催するのは、日中国交正常化五〇周年という節目であるからであり、そのことはむしろ清華大学側からの要請であると認識していた我々にとっては、全く予想していないことであった。

外務省のホームページをみると、日中国交正常化五〇周年事業が目白押しで、ロゴマークも用意されている。もちろん、この展覧会もそのなかの事業の一つとして申請したうえで、県庁幹部などが、上京して外務省当局とも協議をおこなっていた。北京で開催する事業については、コロナ禍により中止を余儀なくされたものもあり、この展覧会のほかはあと一件の開催が予定されていただけで、中国国内で開催された重要な事業のなかで、最も盛大に開催されたものの一つとして意義づけられることとなった。

写真３　日中国交正常化50周年記念の表示

写真４　開幕式で挨拶する海野氏

五．渡航手続きと集中隔離

私は、前述した四八時間前のPCR検査を一〇月一日に大阪で、二四時間前のPCR検査を東京で受けたのち、黄山美術社彭玉煜氏・広渡潤氏に前述の複雑な入国手続きについて手ほどきを受けた。その後、PCR検査の結果と陰性証明書が微信に届き、申請を提出したのが一四時三〇分頃で、その許可がおりたのは、一八時頃であった。そしてその後、成田のホテルに向かった。

一〇月三日が渡航日であり、成田空港九時五分発のANAの直行便で北京大興国際空港に向かった。飛行機は満席であり、中央列シートの真ん中に坐るはめになった。前列には赤ちゃんを連れた親子連れが坐っており、時々赤ちゃんが後ろの席にむかって、愛想をふりまいてくれたことが唯一の救いであった。

目次

「アジアをつなぐ美と精神」展の顛末（中）　坂靖　1
ソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘とイタリア見学行（上）　北山峰生　5
韓国国立文化財研究院との新たな協定の締結　光石鳴巳　7
ひとの動き、附属博物館展示案内　編集　8

写真５　集中隔離されていた部屋

写真６　隔離施設の部屋から外をのぞむ

出発前に、黄山美術社からは中国の５Ｇ対応ｉＰｈｏｎｅ、空港ではレンタルのポケットＷｉＦｉとルーターを受け取った。私自身、日本ではあまり使い慣れていないものの、スマートフォンがないと身動きできない状況に備えた。私は、中国語はもとより、英会話もからっきしできない。スマートフォンで文字を打つことも苦手である。そのようななか、ビザの申請手続きから渡航まで、海野氏や黄山美術社の助けを得ながら単独でおこなった。「奈良の仏像海外展示」においても、随展業務担当者は単独で渡航しており、旅行社による随伴は認められなかった。

また、渡航前のＰＣＲ検査の費用についても旅費（渡航準備費）のなかに含めることをなかなか認めてもらうことができず、一月上旬にいたっても、その精算が終わっていない。[1] さらに、出張中の中国国内交通費と昼食・夕食費にあたる日当は、集中隔離の期間はゼロだという。こうした奈良県当局の扱いは、私の日頃の不勉強と、先例や規定などに縛られた考えにすぎないが、やはり非情ともいえるものであり、大変寂しい思いになった。

さて、北京大興国際空港には予定どおり現地時間の一二時五分に到着し、早速、例の白い防護服を身にまとった人々に取り囲まれながらの諸手続きやＰＣＲ検査があった。それを終え、一四時頃にバスに乗り込んで隔離施設に向かい、一時間半ほどかけて到着した。

隔離施設は、買い手のつかない北京大興区瀛海鎮潤棠海社という郊外の１ＤＫのアパート群で、その一室に隔離されることとなった。部屋の外では、新築アパートの建築工事が投光器をつけて二四時間体制で進められており、失礼ながら、勤勉に動き回る中国の労働者たちの姿を目の当たりにすることとなった。

この隔離施設では、ＰＣＲ検査や体温測定をおこなう一方、物資や食料の配給をうけ、日本から持ち込んだＷｉＦｉが安定的に繋がり、通信環境も万全で諸処の連絡事項と締め切りの迫っていた論文の原稿を書くなど、比較的快適な生活をおくることができた。このときはじめて微信に翻訳機能があることを知ったが、日本にいる彭玉煜氏と先乗りしていた海野氏に連絡をとることによって、なんとか様々な問題を解決することができた。

六．展覧会の評判

一〇月一三日に集中隔離を終え、紙ベースの隔離解除告知書がぞんざいに手渡されたのち、隔離施設で私を出迎えてくれたのは、鑑鐘文化（黄山美術社の北京支店）の羅逸琳氏であった。日本語が堪能で発音も正確であり、こののち何かあればすべて彼女に頼ることになる。

隔離施設からホテルへは彼女の自家用車で直行し、ホテルで海野氏と合流した。ホテルのチェックインに必要であったのは、紙ベースの隔離解除告知書と前述の健康コードのほかに、「通信行程卡」という旅行行程を示す微信アプリであり、それらを全て提示し、ようやくチェックインできた。その後、清華大学まで徒歩で移動し、その途中のプレハブでＰＣＲ検査をうけた。このとき、四八時間ごとのＰＣＲ検査が義務であるが、外国人は毎日ＰＣＲ検査を受けた方がよい、ということを海野氏から教えてもらった。それから、清華大学近くの羊肉を料理する飲食店に各自が健康コードを示して入り、海野氏と羅氏と私の三名で、ささやかな隔離解除を祝する酒席を開いた。

一〇月一四日、精華大学芸術博物館に行き、ここではじめて王氏と対面した。会場に入るとまもなく、展示の責任者で、たびたびオンライン会議に出席していた談晟広氏が駆けつけてくれた。展覧会の会場は、活気にあふれ、ボランティアの解説員が中山大塚古墳の前方後円墳の模型

を前に解説し、観覧者がその解説に耳を傾けている最中であった。私と談氏が羅氏をまじえて挨拶をしていると、観覧者から静かにしてほしいという注意が入った。恥ずかしい思いと、その熱心さに感銘をうけた。

このちも会場に足を運ぶと観覧者がつぶさに作品を鑑賞する様子や、解説員の説明を熱心に聞いている様子を目の当たりにし、北京市民のなかに、日本の歴史や文化に対して強い関心をもつ方々が多くいることを実感した。この点は、いささか私が誤解していたようである。コロナ禍で海外渡航が制限される前、多くの中国人が観光を目的に来日していたことからすれば、そのことは自ずと明らかなことである。

写真7　ボランティアによる解説の様子

ともかく、展覧会自体は大変評判もよく、『人民中国』やCCTVをはじめとした中国国内の報道機関でその趣旨や展示内容が詳細に紹介されたほか、「博物館頭条（ヘッドライン）」というWEBサイトにおいて、二〇二二年秋季に中国内で開催された十大展覧会のひとつに選出された。これは、中国国内の六千あまりの展覧会を趣旨、出品作品の質、内外への影響力などさまざまな指標に基づいて点数をつけ評価して選出されるもので、大変名誉なことだといえる。もっと日本の歴史を知りたい、日中交流の長く深い歴史を知りたいという知的欲求に、この展覧会が一定程度応えたものであったと確信する。

しかしながら、海外への渡航が制限されているばかりか、北京市外から市内に入るにも隔離が要請されていて、結局、閉幕まで外出・行動制限は解除されることなく、北京市民以外はこの展覧会を観覧することはできなかった。一二月までという、比較的長期の日程を確保していただけに極めて残念なことであった。

七．生活環境と展示環境について

海野氏の帰国は一〇月一七日で、それまでのあいだに業務の引き継ぎをおこなった。海野氏は中国の国内生活にすっかり慣れ、アリペイのツアー・パスと呼ばれる外国人でも使える電子マネーを使って買い物をし、レンタル自転車を借りたり、タクシーを呼んだり、地下鉄に乗ったりしていた。また、北京市内の各種の博物館に予約を入れて、その観覧をおこなっていた。中国で生活するうえで、現金での決済は難しく、微信ペイかアリペイといった電子マネーが必須である。そうしたなか、私は当初の入力に誤操作があったためかアリペイが使えず、最後まで現金で決済せざるを得なかった。

ホテルから精華大学芸術博物館までは、徒歩では三〇分ほどかかったので、一〇月二〇日には、自費（四八〇元）で自転車を購入することにした。海野氏の逗留していたホテルからも博物館へはかなりの距離があった。海野氏はアリペイを使い、レンタル自転車で博物館まで通っていたのであるが、私はそれができなかったので、羅氏を通じて現金で自転車を購入した。

博物館では、海野氏から引き継いだ展示物の点検、温湿度など展示環境の確認、展示替えなどの業務にあたった。展示環境については、協議段階から懸念されていたことである。二〇一六年に開館した新しい博物館であり、展示室・展示ケース内は一定の温湿度を保っていて、環境ガスの問題も発生していないと博物館側は説明していた。温湿度の記録や環境ガスのファシリティ・レポートなども事前に送付されていたが、それがすなわち展覧会の会場そのものを指しているかは、不分明であった。

果たして、会場には各所に据え置き式の空調機器が設置され、手動で展示室の空調管理がおこなわれていた。展示ケース内には博物館で設置した温湿度計をおき、アナログで温湿度管理をおこなっており、環境ガスの対応等は考慮されていなかった。奈良県側で、輸送段階から震度計付きのデータロガーを置き、輸送から撤収までのデータを記録したところである。

展示ケースや会場に設置されたデータを視認する限りでは、やや振れが大きいものの、指定文化財の取り扱い基準である温度二二度、湿度五五パーセント程度の温湿度環境は保っているようであったが、持ち帰ったデータロガーをみるとかなり下振れしている。さらに、閉幕後の梱包・

輸送時には温度が下がりはじめ、一二月一三日には氷点下一三度にまで達している。展示環境にはあたらないが、極めて劣悪な環境に作品・資料がおかれたことが知れる。開梱時の点検では問題がなかったとはいえ、さすがに今後しばらくのあいだは、海外への輸送はとどめるべきものも出てこよう。

もっとも、日本でホルムアルデヒト、アンモニア、ギ酸などの環境ガスについてうるさく言いだしたのは保存科学の研究が進んだごく近年のことである。東京国立博物館や奈良国立博物館の収蔵庫が改修され、劣悪な環境からようやく脱したのも、ごく近年のことである。今後もこうした取り組みにより、文化財を未来につなぐための努力が必要である。

一〇月一四日に博物館をはじめて訪れた日に、談氏からオンラインでの講座を依頼された。ほどなく、帰国直前日の一一月一二日に講座を開催することが決まり、その準備にも追われることとなった。

清華大学への入構は、微信アプリの「清華紫荊」が必要で、入口でそれを読み取り機にスキャンし入構する。博物館はパブリックエリアにあるため、一旦構外に出てから、入館証を建物の入口で示す。一〇月一四日、王氏にはアプリの入力と大学構内にある食堂の位置について教えてもらい、海野氏からは入館証と大学食堂で使うカード（あらかじめ王氏がチャージしたもの）を受け取った。さらに杜副館長に挨拶をして、夕方の会食に誘われたが、生憎体調不良で、海野氏に私の分も飲むように依頼し、キャンセルした。会食は海野氏のお別れ会となった。この頃は行動制限がかかっていたとはいえ、健康コードさえクリアできれば会食は比較的自由であった。

しかし、どういうわけかその日の夜に私の健康コードにポップアップが出て、外出制限がかかることとなった。早速、羅氏に連絡し、飲み過ぎで体調不良となっていた海野氏とともに、北京大学病院にＰＣＲ検査を受けに行った。このような時には、病院でＰＣＲ検査を受け陰性であることを確認するほかはないようである。こうして、その翌日にようやくポップアップは解消され、海野氏とともに清華大学に留学中の厚谷禎一氏を紹介され、大学食堂で昼食をともにした。私は足が痛く体調がすぐれなかったため、海野氏の市内案内をキャンセルすることになり、せっかくの好意を無にしてしまい申し訳ない思いになった。夕方にはホテルの三階にある高級中華店でささやかな帰国にむけてのお疲れの酒席を開いた。

八．北京市内視察と「濃厚」接触

一〇月一四日には、展示期間が限定されていた県立美術館の絵画資料を展示室から下げる作業をおこなった。また、一〇月二〇日には、日立北京総代表が来館し、その案内をすることとなった。総代表は、説明をはじめるとまもなく先へ先へと進み、古い時代の日中交渉史というテーマは、中国人の観覧者が強い関心をもつのと裏腹に、特段の関心をひかなかったようであり、それはそれで残念なことであった。

今回の北京訪問の目的に、北京周辺の遺跡や博物館などを訪問することがあった。二〇一〇年の西安での随展・撤収業務では、西安周辺の遺跡、博物館などの視察が予定に組み込まれていたが、今回は自費で黄山美術社を通じてガイドの魚錦順氏と運転手を雇って出かけることとした。中国共産党全国代表大会が終わり北京市内が落ち着きを取り戻した一〇月二六、二七、二九日の三日間、中国国家博物館、天壇公園、明十三陵、居庸関（万里の長城）、周口店、盧溝橋などにでかけた。もちろん、それぞれの入場や入館などには、予約と健康コードや行程コードの提示が必須であった。郊外に出ると、日本から持って行ったポケットＷｉＦｉが通じず、運転手のもっていた中国製ｉＰｈｏｎｅのデザリング機能を通じてようやくそれらを使うことができた。

さらに、頤和園、首都博物館の訪問を予定していたが、二七日の明十三陵の訪問で濃厚接触者となり、それが叶わなかった。また、清東陵・西陵や北京市周辺の遺跡見学も、前者は北京市外に所在すること、後者はスケジュールなどの関係から断念せざるをえなかった。

さて、明十三陵のうち、訪問したのは公開されている神路（陵道）、定陵、昭陵であったが、午後に訪れた昭陵において、同時間の広い空間のなかに感染者が一人訪問していたということで、濃厚接触者扱いとなってしまった。世界遺産の広い敷地で、もとより他の訪問者と接触した覚えもなく、もっと言えば人とほとんど出会わなかったのに、誠に理不尽なことであった。

中国当局から私のiPhoneに連絡が最初に入ったのが、二九日の夜の七時四〇分頃で、周口店・盧溝橋の視察と毎日のPCR検査を終え、ホテル二階のすっかり顔なじみとなったレストランで夕食をとってから、部屋で休んでいたときのことであった。もちろん、何を言われているかわからず、羅氏に取り次ぎを頼んだが、結局「濃厚」接触に該当することは間違いないとされた。そして、ホテル一二階の部屋からの退去を命じられ、一〇時頃にホテル六階の隔離部屋に移動することとなった。そのあいだも警察やホテルのフロントから連絡が何度も入ったが、中国語がさっぱりわからないので、そのたびごとに羅氏に電話をかけ直してもらい、その状況を確認することが続いた。三〇日の朝は、羅氏がホテルに頼んでくれて朝食を部屋の前に運んでもらって摂ったが、その直後にホテルでの隔離では手ぬるいということらしく、北京市郊外の強制隔離施設に移動するという連絡が届いた。

（下に続く）

編註

（1）令和五年四月末に精算が完了した。

ソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘とイタリア見学行（上）

北山峰生

二〇二二年度に、海外での調査に参加する機会が与えられ、当研究所の木村理恵、河﨑衣美、北山の三人でイタリアへ赴いた。東京大学ソンマ・ヴェスヴィアーナ発掘調査団（以下、調査団）が以前から継続しているソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘調査に、当研究所から参加させて頂く運びとなったのである。渡航期間は九月三日から二五日の約三週間。多くの方々のお世話になり、また貴重な経験をさせて頂いたことに感謝したい。

一．出発まで

この渡航の趣旨は、イタリアで実施されている発掘調査を経験するとともに、同国の遺跡等を見学して自らの知見を広げる機会とすること、というように私は受け止めた。イタリアでの調査も、同国の遺跡も、私にとっては普段からなじみがあるわけではない。そのため、どういった展開が待ち受けているのかまったく想像もつかず、戸惑いが大きかった。それと同時に、普段とは異なる環境に飛び込むことへの漠然とした期待もあった。

日程については、現場の進行との兼ね合いがあるのは当然だが、一定の枠組の中で、比較的自由に私たちの希望で決めさせてもらえた。このため、調査現場半分、遺跡見学半分に当てることにした。ただ、単純に前半、後半と分けても良かったのだが、発掘調査のことであるから進捗状況の異なる作業段階を経験するのも良かろうと思い、初めの五日を現場、中間の十日ほどを見学に当て、終わりの五日ほどを再び現場で過ごすという予定を立てた。調査そのものは八月下旬に機械掘削を開始し、一〇月初旬に終了する予定であったので、私たちは九月五日に現場に合流し、途中の遺跡見学も含めて九月二三日まで現地に滞在する予定に落ち着いた。

二．旅程のあらまし

この渡航期間中、初めの五日間はソンマ・ヴェスヴィアーナにて発掘調査に加わった。この間、調査団の宿舎でお世話になった。

その後の十日ほどは各地の遺跡見学に出かけた。まずは宿舎から日帰りできるナポリ周辺の遺跡を数日かけて訪れ、その後ローマへ移動し、ローマ近郊の遺跡を見学した。ここ

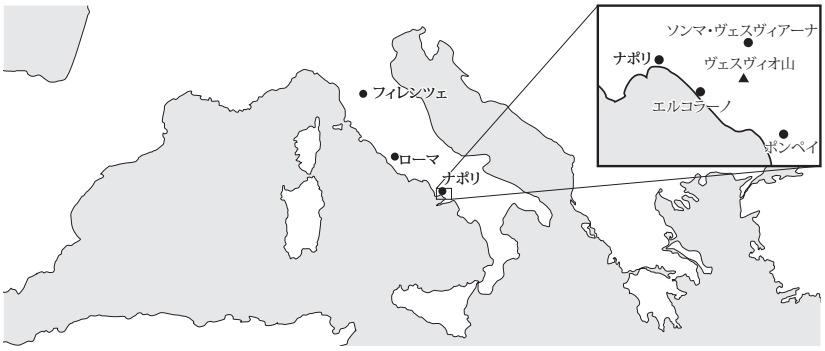

図1　ソンマ・ヴェスヴィアーナの位置

写真１　ソンマ・ヴェスヴィアーナから
ヴェスヴィオ山をのぞむ

までは三人で同一行動をとった。その先は分散行動とし、木村はアッシジやフィレンツェなどの中部イタリア方面へ、河﨑と北山はシチリア島のある南イタリアへとそれぞれ別れて見学に行った。

こうして九月一九日に木村と北山は宿舎へ戻り、翌日からまた発掘調査に加わった。ただし、河﨑は一九日以降も見学を続け、マテーラやモルフェッタ、ビトント、バーリを訪れた後、二二日に宿舎へと戻った。

なお、九月二三日、すなわち現地滞在の最終日には、ナポリの大学に在籍する考古学専攻生に向けた講演を実施する機会があり、三人それぞれに自らの調査・研究成果を発表した。

三．ソンマ・ヴェスヴィアーナ

発掘に携わった場所は、遺跡自体に固有の名称がついているわけではなく、ソンマ・ヴェスヴィアーナという町に所在するローマ時代の遺跡というのが正しいのであろう。ただし、実際のところはソンマ・ヴェスヴィアーナで通用しているようである。

このソンマ・ヴェスヴィアーナという町は、イタリア半島のやや南寄りにある、ナポリ近郊の地方都市である。ポンペイを罹災・壊滅させたのと同じヴェスヴィオ山の北麓に位置する。町全体が斜面地に立地し、最上部に旧城壁都市が、そこから北に向けて傾斜を弱めつつ新市街が広がる。新市街には果樹園や農園が散見され、農村の雰囲気を色濃く残している。

遺跡は、元をただせば、二〇世紀前葉に農作業の過程で認識されたことが、その存在が明らかとなる発端であったという。その後、当時の研究者や資産家の目にとまり、調査の実施が画策され、実際に多少のトレンチ調査は行われたものの本格化するには至らず、ついに埋め戻されたということである。その場所を二一世紀初頭から調査団が調査にあたり、約二〇年がたつ。遺跡調査をめぐる人々の営み自体がすでに百年の歴史をもつことになる。

かつてのトレンチ調査では、石造の柱が建ったまま埋もれていることが判明し、かなり豪壮な建物が存在したのだろうとの予想が立てられた。奇しくもローマの初代皇帝アウグストゥス（オクタウィアヌス）が、やはりナポリ近郊の都市ノーラで没したとされていることから、この新たに発見された建物は彼が晩年を過ごした別荘ではないか、との考え方がなされたという。このアウグストゥスの別荘説は地元ではかなり支持されているようで、調査団の発掘が進むにつれ最寄りの鉄道駅がヴィラ・アウグステアに改称されたのも、期待の大きさの現れなのであろう。

調査団では二〇〇一年にボーリング調査、二〇〇二年に過去のトレンチの再掘削を実施したのち、二〇〇三年から、発掘調査を継続しており、現在に至るとのことである。およそ二〇年の調査歴の中で、かつて露見した石造柱を含む建物が発掘されている。

四．発掘現場

二〇年来調査されてきた建物は、中心施設の周囲にいくつもの施設が付属する構造で、二世紀頃に建てられたあと、修築・増築を繰り返して数百年間維持されたようである。はじめは公共性のある存在であったものが次第に性格を変え、世俗的なものへ変遷したと理解されている。最終的に四七二年のヴェスヴィオ山の噴火がきっかけで廃絶を迎えることが明らかとなっている。

この二世紀代の建物の下層にも別の壁体が存在することが判明しており、紀元前に遡る建物が存在する可能性が考慮されている。そして、現在では下層壁体の方に調査の主眼が移りつつあるようである。特に二〇二二年度は、前年度のトレンチで検出された下層壁体について、その壁体を埋める堆積物の精査に力が注がれた模様であった。その結果、西暦七九年のヴェスヴィオ山の噴火で罹災したことが確実視できるようになった、とのことである。

そこまでの成果は私たちが参加するまでに上がっていたので、精査の過程に立ち会うことはできなかったのだが、その判断の理由などを詳しく解説して頂けた。いわく、年代の決め手となるのは上下の包含層から出てくる遺物もさることながら、堆積物に含まれる軽石であるとのことであった。ヴェスヴィオ山は西暦七九年に三回の噴火をしており、それぞれで噴出物が異なることが明らかにされている、そして今回確認した軽石はその三回目のものに一致する、したがって西暦七九年以前に下層壁体が存在したことが確実視される、

写真２　発掘現場にて　下層壁体を検出しているところ

というわけである。今後は、下層壁体の広がりや、その構築年代が追求されることになるのであろう。

さて、私たちが現場に合流した頃、調査の具合は次のようなものであった。すなわち、建物の中はほぼ完掘されているものの、屋外には未掘の部分があり、いまだ建物の基底部が埋もれている。そこで、建物築造時の地表面を露出させる作業が行われており、その作業の一環として先述の下層壁体が検出されたトレンチも掘削されていたのであった。私たちも、地表面を露出させる作業に加わった。ある日、地表面に近いところで建築材と思しき玄武岩のチップが堆積している部分があり、建築にあたり現場合わせの作業が行われたのだろうかと想像を巡らせた。

また、調査の後半では下層壁体の広がりを確認するためのサブトレンチも掘削した。過去のトレンチで壁体の二箇所が確認されており、その間に延びる壁体を露出させることが目的であった。ちょうど木村が掘り下げに当たっているとき、既知の壁体から直交方向に派生する別の壁体が検出された。ということは下層建物の新たな広がりが確認されたわけで、現場でささやかな歓喜の声が上がったのが印象的であった。もっとも、サブトレンチの幅が狭く、それゆえ新たに検出した部分が壁体として延びていくのか、それとも既知の壁体に取り付く付柱であるのか、今後の見極めを要するとのことではあったが。

これらの遺構は、主として石積みや煉瓦積みを交えたコンクリート造である。このため、埋没後に腐朽することがなく、当時の姿のままで眼前に現れることとなる。発掘では地表面下約一〇メートルの地底が作業面となっており、そこから高さ七メートル以上の建物を見上げながらの作業であった。日本で一般的であるところの、土の中で痕跡をみつけ、土層をもとに遺跡を立体的に把握する発掘と、原則は同じである。だが、実際に建物そのものが残っているからこその難しさがあるように思えた。建物の同時性、築造順序、併行関係など、整合的な解釈をするために独特な工夫がなされているのであろう。

（下に続く）

韓国国立文化財研究院との新たな協定の締結

橿原考古学研究所では二〇〇三年に韓国国立文化財研究院（当時は研究所）と「研究員の交換派遣に係る協定書」を締結して、相互の研究員派遣を通じて交流を深めてきた。しかし、二〇二〇年以来のコロナ禍により相互派遣は途絶えている。

そうしたなか、二〇二四年が交流開始二〇周年となることも踏まえ、韓国側から協定の内容見直しを求める打診があり、両機関間で新協定締結に向けた協議が始まった。二〇二二年度に至り、新たな協定は両機関の協力関係の方向性を定めた包括協定と、実施の細目を定めた細目協定とすることなどの合意形成が進んだ。二〇二三年二月に日本側から代表団が渡航し、協定の締結式が執り行われることとなった。

代表団は青柳所長、大峯副所長、光石企画学芸部長、佐藤総務係長、小栗企画係長の五名で、二月二六日に韓国入りした。同日は、招きを受けて漢城百済博物館（ソウル特別市）を訪問した。同館からも前年度に機関間の交流について打診を受けており、交流実現に向けて意見交換した。

翌二七日に大田広域市へ移動し、国立文化財研究院を訪問した。所内での会談、施設見学の後に同市内のオノマホテルへ場所を移し、協定締結式が催行された。「文化遺産交流協力に関する包括協定書」には青柳所長とキム・ヨンス国立文化財研究院長が、「研究員派遣を通じた交流協力に関する細目協定書」には光石とパク・ユンジョン文化財研究院考古研究室長が署名し、協定締結が成立した。同日午後には文化財研究院側の案内のもと国立扶余文化財研究所を訪問し、施設の視察に加え、扶余及び公州の遺跡を視察した。

代表団は二八日に帰国して行程を終えた。協定締結を受け、早ければ二〇二三年度から人的交流が開始される予定である。（光石鳴巳）

協定締結式の様子

ひとの動き

（退職　令和五年三月三一日付）

岡林孝作　副所長兼附属博物館館長
→学芸アドバイザー

（転出　令和五年三月三一日付）

上田美鈴　総務課長
→橿原高等学校事務長

鈴木一議　調査部調査課調査第二係
指導研究員
→文化財保存課兼務

藤元正太　調査部調査課調査第二係
主任研究員
→なら歴史芸術文化村主任研究員兼調査部調査課第二係主任研究員

（転入　令和五年四月一日付）

松浦悦子　広域水道センター総務課
総務契約係長
→総務課長

宇野隆志　文化財保存課兼務
→調査部調査課調査第二係
主任研究員

岡見知紀　なら歴史芸術文化村主査
→調査部調査課調査第二係
主任研究員

（昇任　令和五年四月一日付）

川上洋一　調査部長
→副所長兼附属博物館館長・調査部長事務取扱

青柳泰介　企画学芸部学芸課学芸係長
→企画学芸部学芸課副主幹
兼学芸係長

小倉頌子　企画学芸部資料課資料係
技師
→主任技師

岩越陽平　調査部調査課調査第一係
主任技師
→主任研究員

中尾真梨子　調査部調査課調査第一
係技師
→調査第二係主任技師

小泉翔太　調査部調査課調査第二係
技師
→主任技師

黒澤ひかり　調査部調査課調査第二
係技師
→主任技師

（兼務　令和五年四月一日付）

大西貴夫　調査部調査課長
→世界遺産室室長補佐兼務

岡田憲一　調査部調査課調査第二係長
→世界遺産室世界遺産第二係調整員兼務

（新規採用　令和五年四月一日付）

蓮井寛子　調査部調査課調査第一係
技師

冨田　樹　調査部調査課調査第二係
技師

附属博物館展示案内

◎令和五年度春季特別展

「神宿る島　宗像・沖ノ島と大和」

開催期間：令和五年四月二二日（土）～六月一八日（日）

世界遺産〝「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群〟の中核をなす宗像・沖ノ島には、日本列島、朝鮮半島および中国大陸の諸国間の活発な交流に伴い、四世紀後半から九世紀末まで続いた、航海安全に関わる古代祭祀遺跡が残されています。

今回の特別展ではこの祭祀に大きく関与した大和の視点から、王権祭祀と古墳の副葬品をキーワードに国家祭祀の実像に迫ります。

国宝　金銅製龍頭
（沖ノ島５号遺跡　宗像大社所蔵）